
雨恋

ノダメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨恋

【著者名】

ノダメ

N7555A

【あらすじ】

雨の日にふとみつけた彼に恋をした彼女は、いろんな思いをかかえながら話しかける決意をするが・・・

第一話始まりと決意（前書き）

バスや電車の中でのひと瞬の恋をしたことがありますか？

第一話始まりと決意

雨が雪のように美しく降ったその日、私はバスの中から彼を見つけた。

彼は、いつも雨の日に傘をさして雨を振らせる空をやさしくみつめていた。

私は、いつのまにか、バスの中から一瞬見える、彼の姿をおつていました。

彼は、いつも同じ場所にいました。

ある晴れた日、私はその場所で彼を待ちました。そして、彼と同じように空をみつめました。彼は、きませんでした。

つきの日は、雨になり私は、彼を見つけました。

私は、バスをおりて彼のもとへ、まだ話したことも彼のこと何も知らないのにただそばにいたくて走りました。

彼は、私にきづきませんでした。

彼がみつめていたのは、雨を降らせる空ではなく、雨の日であらわれる出窓の女性でした。

その女性は、雨をふらせる空を悲しげにみつめ、その姿はまるで零の涙を流す鈴蘭の花のようでした。

私は、彼に、話しかけずバス停にもどりました。

心の中は、彼になにをきたいしていたのか、ただの興味本意ではなかつた。ほんとの好き。いろんなことがはりめぐされています。

ただ、彼のことで心は、いっぱいでした。

次の日から、私は、違うバスに乗ることにした。

彼への気持ちは、心のおへにある箱へしまって鍵をかけた。
そして、忘れてしまおうと誓いをかけた。

第一話始まりと決意（後書き）

自分におきかえてよんでもうただけたらとおもこます。

第2話彼（前書き）

彼女は、彼に恋をしたそして彼を知らないまま彼のもとから去ります。彼は、彼女にきついでいるのか。

第2話彼

俺が彼女と出会ったのは、雨の日、いつもバスの中からじめりを見つめる女性にきずいたからだ。

俺はその日、別れをつげようと恋人の家の前にたつていた。

雨の日にはじまつた彼女と雨の日に終わりにしようつと思つたからだ。

彼女を思い続けても、彼女の心に俺はいないからだ。
だけどなかなか決心がつかずいつも雨にあたりながら悲しげに空を
みつめる彼女をみてしまう。ある雨の日いつものように彼女をみて
るとあの時のバスの女性が走ってきた。

何言われるかと思ったがきずかないふりをしていた女性は、何も
言わずにさつていった。

あれ以来、バスの女性は、見なくなつていった。
なぜか話したことも、ないのに気になつてしまふがなくなつた。
そして、恋人に別れをつげたあとバスの女性のいる時間にバスに乗
つてみたがその女性は、いなかつた。

会いたい。ただそう思つた。

雨の日に女性は、バスから何を切なそうに見ていたんだろう。
俺のそばに来た時も、かすかに涙をうかべてた気がした彼女は、今
どこにいるんだろう。

今は、あんなに思つていた恋人が思い出になり、俺はバスの彼女を探した。晴れの日にバスに乗つたが彼女は、あらわれなかつた。
どうしたらいいんだろう。

昼間のバスにも、彼女はいない。
もうこの場所にくる用事もない。
俺は、違うバスに乗ることにした。
そのバスで彼女を見つけた。
話し掛けようと思った。

いろんな言葉を考えたがどれもいまこちな気がしておもわずその場から逃げてしまった。

俺は、馬鹿だ。

あんなに会いたかったのに逃げ出すなんて今度あつたら絶対逃げないぞ。

そう決心した。

第2話彼（後書き）

彼と彼女のお互いの気持ちを書いてみました

一人の雨（前書き）

会わないとと思っていた彼に出会ってしまった私は、彼への気持ちが・
・

一人の雨

私は、心の箱にしまった彼に出会いてしまった。

彼のことは、片時も忘れたことは、ない。

箱に鍵をかけたつもりで何度もあけてしまった。

会いたかった。

彼は私の目の前に立っていた。

でも、すぐに立ち去ってしまった。

すぐに追いかけたけど追いつかなかった。

名前を知らなかつたので呼び止めるることもできませんでした。

つぎは、絶対話そう。

彼に会いたい。私は、どうしたら彼に会えるかと考えました。

そして私は、初めて彼と会つたあのバス停で雨の日で待つことになりました。

ドラマでもなければ彼は、来ないと想いながらも私は、あの時の彼のように空を見つめました。

そして、男の人があるたびに彼では、ないかと期待し待ちつづけました。

一ヶ月たち私の気もおさまりあきらめかけて空をみつめたとき、私は声をかけてきました。

彼でした。

私は、うれしさのあまり彼に抱きつきたい衝動にかられ、一心にそれをおさえました。そして彼の言葉に耳を傾けました。

彼は、昔の恋人に私のことをきいてここに来ました。

ただ自分でもなぜ私のことが気になつたのかわからずただ会いたかつたという。

私は、その言葉を聞いてるうちに目から涙がこぼれあちました。

そんな私を彼は、やさしく自分の胸へと引き寄せました。

私は、彼にそばにいてほしいと頼みました。
彼は、私のそばにいることを約束しました。

私の涙は、雨のようになるとあります。

雨は、キラキラと祝福の光のように降っていました。

一人の雨（後書き）

最終回までありがとうございました。一人がこれからどうなるかは、読んでくれた方の想像にまかせます。いろいろ自分におきかえて楽しんでください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7555a/>

雨恋

2010年11月23日16時42分発行